子どもとまちづくり学習

～ふるさとの食自慢・具志川市子ども物産展の開催～

嘉　納　英　明

ＡＢＳＴＲＡＣＴ（要旨）

本報告は、主として「食」に関連する市産品（県産品を含む）を学習の対象にした総合学習の実践記録である。報告の内容は、第一に、“まち”の特産品の“よさ”を子どもの視点から再発見し、探求活動を展開したこと、第二に、子どもの探求活動を通してとらえた特産品の“よさ”を、子ども主催の「具志川市子ども物産展」の場で広く市内外へ“まち”の情報として発信した過程を分析的に記述したものである。なお、本報告は、具志川市立あげな小学校（平成12年度）における授業実践である。

１．子どもにとってのまちづくり学習の意義

子どもがまちづくりに主体的に関わる学習機会をもつことは、将来の地域（まち）づくりに関わる人材を育てるという観点から重要であり、また、まちづくりの学習活動を通して、子どもの心情の中に自分の住む地域（まち）に対する愛着を育み、郷土愛を育てるものになるにちがいない[1)]。平成11年度、具志川市立あげな小学校５年生は、校区内にある沈滞化した商店街（安慶名（あげな）市場）に積極的に関わりたいと願い、商店街におけるボランティア活動や、ゴミ拾い等の環境浄化運動を展開し、一方では、将来の安慶名像「大壁画：夢と希望のまち　あげな」を制作し、具志川市長へ提案した。学習のまとめは、子どもの企画立案による「あげな子ども市場」を開催することで、活況のあった商店街を一日再現するという貴重な経験をした。「あげな子ども市場」の開催は、一過性のイベント的な性格をもつものではあったが、商店街を活性化したいとする子どもの願いが具現化したものとして意義深いものであった。子どもが地域（まち）の問題の所在を探求し、主体的に問題解決に関わる中で「あげな子ども市場」の開催となったというわけである（詳細は、拙稿「子どものまちづくり実践～商店街（安慶名市場）の活性化を考える～」『沖縄大学地域研究所年報』第15号、沖縄大学地域研究所、2001年３月、91～111頁を参照されたい）。

ところで、「あげな子ども市場」の開催は、現状の商店街を活性化したいと願う子どもの創造的な活動であったといえるが、その反面、地域の“よさ”を市内外へ情報発信すべきだという視点も実践的な課題として析出されていた。つまり、前回の実践活動を通して、子どもの住む“まち”の“よさ”の掘り起こしと、その情報を発信す

るという実践的な意味を見出していたのである。換言すれば、子どもが地域情報を取捨選択・加工し、発信することは、子どもが“まち”を積極的にとらえかえし、より主体的にまちづくりを考えることになるのではないか、ということである。以上の認識に基づき、「食」に関連する市産品を「ふるさとの食自慢」として取り上げることにより、“まち”の地場産業を考える学習活動を計画・実践した。以下、学習活動のねらいを掲げる。①地元・具志川市の特産物（主として「食」に関わる産物）の特徴や生産・出荷・販売方法のあり方を探求することにより、具志川市には県内外にも自慢できるものがあることを再発見する。②具志川市の特産物の再発見を通して、生産に関わる人々の商品開発のための工夫や努力を学びとり、郷土・具志川市の発展に対する子どもの思いや願いを育む場とする。①及び②をふまえた上で、③「具志川市子ども物産展」の開催により[2)]、学校と地域、地元の関連企業との結びつきを深め、学校と地域が、共にまちおこしを考える機会とする（後掲の〈資料１〉「学習活動計画」参照）。子どもが地元の特産物を探求していく中で、その“よさ”を再発見し、それらを「ふるさとの食自慢」として市内外へ発信する目的で開催した「具志川市子ども物産展」に至るまでの過程を、以下、分析的に述べていきたい。

２．具志川市の特産を知らない地元の子ども

「食」に関わる県産品を問われると、ゴーヤー（苦瓜）、沖縄そば、中味汁等と答え、あるいは、さとうきびやパイナップルを挙げる人も多いだろう。後者は、日常的に食するものではないが、亜熱帯に位置する沖縄の特産物として知られており、社会科の教科書（小学校４年生版）にも掲載されている。前者の食材・料理は、日常食であり、学校給食の中でも沖縄の伝統的な料理として提供されている。本校３年生以上に対して実施した沖縄の郷土料理に関する調査では、上記の料理名も含まれていた（次頁「表１　給食にでる郷土料理」『平成10・11年度　生活リズム・学校給食に関する実態調査』具志川市立あげな小学校）。平成12年度の４年生（表１の３年生）対象の調査においても、沖縄料理が子どもの食生活の中に浸透していることを示す結果となっている（「表２　沖縄の特産・名物」）。

以上の調査から、子どもたちは沖縄の料理名についてある程度知っていることがわかったが、地元・具志川市の特産や特産物についてはどうだろうか。具志川市の特産については、「具志川そば」や「豆腐」を挙げるものもわずかながら見られたものの、無回答もしくは沖縄県の特産との混同がほとんどである。「具志川の食べ物は、有名なものがないし、知られていない」「具志川の食べ物について勉強したことがないからわからない」というのが子どもの率直な声である。

表１　給食にでる郷土料理

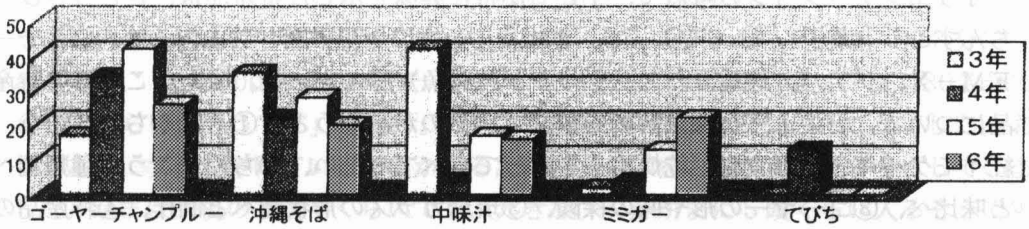
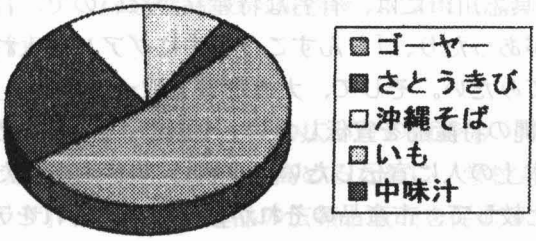


表２　沖縄の特産・名物



３．地元の特産とは何か―子どもの関心が深まる―

（１）特産品と子どもの関心

前述の子どもの食に関する調査結果をもとにして、４年生の「ふるさとの食自慢」の学習は始まった。まず、「沖縄県の特産は何だろうか？」に対する子どもの回答は、多岐にわたるものであった。さとうきびやパイナップルを始め、前述の調査で得た沖縄の郷土料理名を次々に挙げた。これに対し、具志川市の特産となると、地酒や飲料水（ＥＭ－Ｘ）等を答えるものの、わずかであった。そこで、具志川市で生産されているものを例示した。地酒（はんたばる）、菓子（ＥＭちんすこう、グワバ水饅頭）、ぬちマース、ウコン黒糖、ビーグ、カマ等を提示すると、子どもたちは目を見張り、驚き、その後、グアバ水饅頭を全員に味見させた。市産品に興味をもたせるねらいで展開したオリエンテーション（第１時）を終えた勝弥（かつや）は、市産品を含む沖縄県の特産品の多さに驚いている。勝弥は、昨年度末、東京から転入してきた子である。「沖縄には、特さんがいっぱいあることがわかった。東京にはないものもいっぱいあったから、すごいと思った。もずくとか、オリオンビールとか、ゴーヤーもあるからすごい。沖縄は、小さいけどすごい」。第１時を終えた子どもたちの反応の多くは、①沖縄県や市の特産品を詳しく調べてみたい・試食したい、②沖縄県の特産品と比べて市のそれが少ないのはなぜか、③沖縄県の特産品の中には、意外にも本市でも同じものが生産されていることに気づいたこと（例：ちんすこう）、④市にも有名な特産品があっ

て欲しいという願い、⑤沖縄の料理には「豚」を使ったものが多い、等である。

オリエンテーションの時点で、子どもが特に興味を示した特産品は、さとうきび、ちんすこう（菓子）、紅イモケーキ、乾燥梅干、ウコン黒砂糖、具志川そば、ムーチー、ＥＭ－Ｘ、グアバ、琉球ガラス、グルクン（県魚）等であった。また、これらの特産品について、どのような探求活動を望んでいるのかを問うと、①そばやちんすこう、紅イモケーキ、赤野豆腐、乾燥梅干を作って食べてみたい、②ちんすこうの種類調べと味比べ、③ゴーヤーの形や味の探険、③琉球ガラスの形状調べと制作、④特産品の生産地調べ、⑤昔の特産品調べ、⑥世界中の有名な果物や野菜の味比べ、⑦自分なりの特産品を作る、⑧シーサーや琉球ガラス、太田焼を作る、等を挙げてきた。子どもの発言の中には、「具志川市には、有名な特産品がないので、自分で作ってみたい」とする亜弥（あや）の願いがあったり、「ちんすこうの中にグアバを入れたり、いろいろなくふうをして、売ってみたい。そして、大きな賞を取ってみたい」（夕季花（ゆりか））という声もある。また、「沖縄の特産品を宣伝したい」（里紀（さとのり））、「いろいろな沖縄の特産を使って、料理を作り、本土の人に宣伝したい」（晴香（はるか））の声もあった。これらは、県産品の知名度の高さと比較して、市産品のそれが低いため、それをアピールしようとする態度の表れであるとみてとれる。

（2）子どもの市産品探しと関心の深まり―焼き豚見学の例から―

第２時から子どもの市産品探しが始まった。まず、子どもの特産・名物探しは、図書館の本や資料、インターネットを活用しての情報収集であった。県産品に関する情報については、基本的な情報は得られるものの、市産品については、印刷メデイアやホームページからの情報はほとんど得られない。そこで、焼き豚に関心を示していた直樹（なおき）と樹（いつき）は、電話インタビューを試み、次のようにまとめている。「ぼくが調べてわかったことは、焼きブタに入っている栄ようは、ビタミンＢやたんぱく質です。一番いいブタは、体重が約30キログラムのブタで、油が多いブタだそうです。ブタの焼き方は、①ブタの口に棒をさして、炭火で焼く焼き方、②石を熱くしてバナナの葉っぱを上と下において焼くなど、いろいろわかりました」（直樹）。また、樹は、焼き豚の歴史を、電話インタビューを元に次のようにまとめている。「フィリピンのある人がとってもお腹をすかせていました。ある時、ブタ小屋が火事になってブタが焼けていました。そのにおいがとってもおいしそうなので食べたら、とってもおいしかったそうです。それが、焼きブタの始まりです。」

直樹と樹は、実際に豚を焼いている場面を見たいと望み、「ぐしかわ焼ぶた」を訪れている。「さいしょにかまを見せてもらいました。いつも使っているかまがこわれていたので、よびのかまでブタをやいていました。そのあと、トルマリン鉱石というものを見せてもらいました。これは、ご飯を炊くときに入れてもいいそうです。かまでやくとき、このトルマリン鉱石というものをおいてからやくそうです。やきブタに、

においをつけるためにムーチーの葉っぱをのせてやいていました。トルマリン鉱石は永久エネルギーをもっているそうです。かまは600度の高熱でブタをやくそうです。やけるとき、皮がパリパリとやけるそうです。20キログラムのブタは、30名分で、ねだんは、３万5000円ぐらいだそうです。50キログラムの重さのブタは、80名分で６万円ぐらいだそうです」（直輝）。「ぼくが見たブタは、かわいい子ブタでした。おじさんは、ブタがやけているか確かめるために、包丁をおしりにブサブサさしていました。かまは、机の２倍半ぐらいです。大きなブタがかまに５頭ぐらい入るそうです。ぼくは、やきブタを食べたかったけど、このブタは、客にあげるものだから、食べることができないよ、と言われました。やきブタの写真を写したり、道具などを写したりしました」（樹）。こうした直樹や樹の「焼き豚」に対する面白い発見は、後日、学年全体の場で報告された。

（３）「ＥＭプラザ」の訪問―学習テーマの広がりの期待①―

子どもの市産品・県産品に対する興味を高めるために、学校近郊の「ＥＭプラザ」を訪れた。「ＥＭプラザ」は、ＥＭ関連品の広報と販売を促進している店である。具志川市は、一昨年、ＥＭによるまちづくり推進プロジェクトを市役所内に発足させ、ＥＭの活用を市民にアピールしていることからも、子どもにＥＭ関連品に気づかせることは大切なことだと考えた。訪問当日、店内の品々に、子どもの目はくぎ付けとなった。子どもたちは、２人のプラザ店員に、「ＥＭとは、いったい何ですか」「この牛乳にもＥＭが使われているのですか」等と矢継ぎ早に質問していた。見学後の子どもの感想を関心別に分類すると、①ＥＭそのものへの関心の高まりがみられたこと、②ＥＭが活用されている様々な品があること、また、それらを家族に知らせたいとする気持ちが出てきたこと、③ＥＭを開発した人（比嘉照夫・琉球大学教授）への関心が芽生えたこと、④ＥＭ関連用品を仕入れて販売したい、以上の４点にほぼまとめられる。

以下、①～④の子どもの関心別の感想を記しておく。①「ＥＭは、びせいぶつの集まりでできているそうです。びせいぶつは、さいきんだそうです。ＥＭは、やさいとかをさいばいするときに、使うそうです。15～６年前に作られたそうです」（斉（ひとし））。②「ＥＭプラザに行って、たくさん、勉強をしました。質問をしたり、気づいたことを書いたりしました。牛乳やジュース、たくさんのものがあり、とても楽しかったです。今日行ったＥＭプラザは、今日がはじめてです。今日行ったことは、お父さん、お母さんに話したいです」（瑞枝（みずえ））。③「今日、ＥＭプラザに行きました。ＥＭという名前をつけた人は、ひがてるおさんという人でした。その人は、すごいと思いました。ぼくは、ＥＭプラザに興味がわきました。今度も行ってみたいです」（勝弥）。④「ＥＭでできたいろいろなもの、くだもの、やさい、おかしなどがありました。ぼくは、ちんすこう博士になったら、ゆりかさんとかつやくんたちと一緒に、ＥＭちんすこうを買って、それを売りたいです」（至（いたる））。

（4）「赤野とうふ」の久高将勝（くだかまさかつ）さんの話―学習テーマの広がりの期待②―

具志川市赤野地区で長年豆腐作りに勤しんできた、久高将勝さんにゲストティーチャーとして登場して頂いた。生産に関わっている方から「生の声」を聞くことにより、仕事の苦労や工夫、そして豆腐作りの願いを、子どもたちに語って欲しかったからである。以下、当日の録音テープを書きおこし、一部抜粋した。

久高さんの講話は、30分程度であった。前半の内容は、久高さんが幼少の頃、音楽や図工が苦手であったが、恩師から「人間は、思い切ってやりなさい。人間は、誇りをもってできる仕事をしなさい。人間は、犬や猫と違う知恵があるので、いつも同じではいけない。努力すれば何でも一番になれる」と言われ、その教えが、今日の豆腐作りに生かされていることを力説したものであった。

○期　日　　2000年５月31日（水）第５校時
○場　所　　あげな小学校４年空き教室
○話　者　　久高将勝（赤野とうふ・代表者）
○聞き手　　４年生児童（65名）及び担任

久高将勝さん

…私が、５、６歳の頃から、お父さんとお母さんは、豆腐作りをしていたんだな。豆腐を作って、それを売って生活していたんだな。おじさんたちの家族は、12名だったんだな。おじさんやおばさんが多くてね。私のおじいさんは、戦争で亡くなっていたから、うちのお父さんが兄弟とみんなの生活の面倒を見ていたんだな。そうすると生活が苦しいんだな。だから毎晩イモ。昔はイモしかないんだな。お米なんて、夢のまた夢。だから、おじさんは、いつかは沖縄一の仕事人になって、おいしい白いご飯を食べたいなぁと思ったんだな。それで、夢を少しずつ自分で努力すれば、できるのかなぁと、熱中するタイプなんだな、おじさんは。人間というのは、本人がやる気があれば、道が開かれるんだよな。心の持ちようによっては、パワーアップできるんだよな。あんなに苦手であった音楽も、今では、ステージに立てるようになったんだな。だから、努力すること、やる気があれば何でもできるんだよ。前置きが長かったんだが、みなさんがたには、おじさんの年代にいかないうちに、世界を制覇するみなさんになってほしいという気持ちで話をしたんだな。

おじさんはさっきも言ったように、世界一のものになりたいといつも思っています。おじさんは「結婚してから豆腐を作りなさい」と言われていたので、豆腐作りの前は、養鶏場と畜産関係ね、豚、鳥、ブロイラーとか、チキンなんかの仕事に行っていたんだな。みんなわかるかな、メスオスの鑑別。おじさんは、努力して独学で99.5％までね、見分けができるようになった。これはね、人というのは、一生懸命やろうとすれば、夢中になるんだ。人は一生懸命すれば、自然と道は開けるんだ

よね。

おじさんが、豆腐の後を継ぐようになっても、それでも生活がいっぱいなんだな。それで、毎日、豆腐を研究していたんだな。まあ、もちろん、おじいちゃんの教えをそのまま守りながら、おじさんはおじさんなりに、こうしたらいいかな、ああしたらいいかな、と工夫してやってきたんだな。それで、沖縄でも一番とはいわないけど、良い方に入るようになったんだな。区域は具志川市内を中心に、遠い所は、宜野湾、普天間あたりね、わかるかな、北谷のハンビー店あたり、それから、嘉手納、沖縄市、勝連、石川まで手を伸ばすようになった。おじさんは「豆腐買ってちょうだい」と一度も言ったことがない。なんでかな？（「自信があるから！」という子どもの声あり）いやまあ、自信があるんだが、その前にね、いろいろ勉強してお客さんに喜ばれるような豆腐を作ったんだな。どんなしたらお客さんが喜んでくれるかな、ああ赤野とうふだったらおいしい、と。

前は、赤野とうふではなかったんだな。おじさんの名前が久高だから「久高とうふ」だったんだな。昔はね、赤野という部落に20軒の豆腐屋さんがあったんだよ。だけど、どんどん年寄りが豆腐作りを辞めていって、残ったのは、おじさんたちだけなったもんだから、１軒しか残っていないもんだから、お客さんから「赤野とうふにしなさい」と言われて、そうなったんだよな。毎晩、工夫しながら、豆腐を作っていったんだよな。そうしたら、お客さんも教えてくれるわけだよな。こういう方法よりもこういう方法がいいよとかね。やっぱり、お客さんを大事にすることが大切だよな、僕らは。お客さんが言うことをよく聞いておく。豆腐を買ってくれたお客さんから、「今日は味が薄かったよ」「今日は辛かったよ」「今日は柔らかかったよ」「今日は固かったよ」と、いつも言うんだよね。これ嬉しいわけ。おじさんの豆腐を大事にしてくれているから。かわいがってくれているからね。それで、おじさんは、そうかじゃあ、少し塩をひいてみようかなぁ、少しニガリを足してみようかなぁとかね、毎日模索してきたんだよね。そして、やっと今日きてはいるんだが、それでもまだ完璧な豆腐ではない、おじさんとしてはだな。目標は世界一のすごい豆腐を作ってやりたいなぁ、と。だから、今でも研究している。世界中に広めてみたいなぁと、これは夢。夢は大きく持とうと思っています。

おじさんは、さっき話したように、小さい頃イモしかないもんだから、いつも、おいしいもの、いいものを求めていたんだなぁ、小さい時からね。だから、これが赤野とうふの原点じゃないかぁと思うんだよね。

講話後、久高さんは、ＯＨＰを活用して大豆から豆腐が作られる過程を懇切丁寧に説明してくれた。特に、①遺伝子組替えのない大豆を使用していること、②衛生安全管理には十分気をつけていること、③豆腐（オカラ）の栄養のこと、④ニガリを入れて豆腐にすること、⑤木箱からステンレスの箱にして、衛生的にも味も格段によくなっ

たこと等を説明した。説明後の質問コーナーは活発であった。例えば「豆腐には、柔らかいものと固いものがあるのはなぜか」という質問に対して、久高さんは、揚げ豆腐、木綿豆腐、絹ごし豆腐を挙げ、ゴーヤーチャンプルー等の調理の仕方によって、豆腐の固さに種類があることを述べた。また、豆腐の栄養については、タンパク質が豊富で体に良いこと、豆腐が四角であるのは、固くしやすい（水切りがしやすい）からであり、白いのは、大豆をつぶした自然の色である、と説明した。久高さんは、一日、2000丁の豆腐を生産するとしたが、これは1万人分の量に相当する。子どもにとっては、大変な驚きであった。このあと、揚げ豆腐と絹ごし豆腐を学年全員で試食した。

講話後の子どもの感想を読むと、①豆腐作りにかける久高さんの情熱や願いに感動を覚えた子どもが圧倒的に多く、②とうふ作りの苦労や工夫に感心した子どもの声もみられた。①の感想には、夕香（ゆうか）の「久高さんは、いそがしいときには、夜もねむらずに長男と交代交代でやっていることがわかりました。とうふを売るとき、お客さんから、『かたいよ』とか、『やわらかすぎだよ』といわれたのがうれしかったそうです。そういわれて、また、研究をしたそうです。今でも研究をし続けていることがわかりました。最後（試食用）のとうふも、工夫がこめられていました」であるとか、「お客さんに、『これ、塩が多いよー』とか、『とうふ、かたいよー』とかを言われると、久高さんは、そういう言葉がうれしいと言っていました。私が思ったことは、『苦労しながら、一生けんめいがんばって、お客さんを喜ばせたい気持ちがあるんだなあ』と思いました。そして、とうふを味見したとき、ふくろに入っているとうふは、あたたかくて、とろけるようなかんしょくがありました。そして、パックに入っているとうふは、つめたくて、やわらかいかんしょくでした。私は、これからもがんばってもらいたいと、その気持ちを伝えたいです」（千明（ちあき））の声に表れている。また、「赤野とうふは、カルシウムがあって、体の健康にいいということ。あと、将勝さんが『赤野とうふは、心をこめて作っています』と言っていました。最後にとうふを食べました。つめたいものとあたたかいものがありました。とうふはとてもおいしかったです。将勝さんが『心をこめてつくります』と言ったのは、とってもおいしいよという意味なのかなあと思います」（麻美（あさみ））。

②に関しては、「今日、久高さんが来て、学んだことは、とうふづくりの苦労や楽しさです。遺伝子組みかえ大豆がありますが、赤野とうふは、その大豆を使っていない、手作りでおいしいとうふです。それから、とうふを食べたとき、思ったことは、あたたかいとうふは、ふわふわしていて、おいしいなと思いました。これからも、とうふづくりを久高将勝さんに頑張ってほしいです」（亜弥）の声や、「久高さんは、小さい頃に、ひいおばあちゃんがとうふを作っていて、それでとうふの作り方を習ったそうです。久高さんは、とうふを作るのに24時間かかったときもあったそうです。久高さんがつかれて休んでいるとき、かわりに息子さんが作ってくれたときもあった

そうです。試食のとき、あったかいとうふを食べると、ほかのとうふよりおいしい気がしました。新せんな作ったばかりのとうふだから、スーパーで買うつめたいのとは味がちがいすぎて、とてもおいしかったです。久高さんは、本当に沖縄一のとうふしょく人です」（夕季花）という声もみられた。至は、「とうふづくりの苦労、楽しさなどを、久高さんは、熱心に言っていました。ぼくは、きっと、久高さんのとうふには、久高将勝さんの気持ちがこめられていると思いました。赤野とうふの試食のときにも、大豆を遺伝子組みかえしないで、手作りでしたので、今までで食べたことのあるとうふの中で、今日食べた赤野とうふが一番おいしかったです」と述べている。

4．特産品探求の始まり―子どもがとらえた市産品の特徴―

数ある特産品の中から、子どもたちが、学習課題として取り上げたのは、①ミネラル成分が世界一豊富な塩（ぬちマース）、②赤野とうふ、③ＥＭ関連品、④車えび、⑤具志川そば、⑥お菓子（ちんすこうを含む）、⑦紅いも、⑧饅頭（「やきもちやき」）、⑨ゴーヤー、⑩トイレットペーパー（昭和製紙工場）、⑪シーサー、以上の11課題、20グループである。ゴーヤーは、本市の特産というよりも、沖縄県の特産品として広く知られているものであり、また、ここで子どもが取り上げたＥＭ関連品や、ちんすこう等の菓子類は、市内外の生産物に「ＥＭ」という付加価値をつけて、本市が販売促進をしているものであって、厳密な意味での市産品ではない。しかしながら、子どもが追究したいという特産品を、あえて教師側から市産品という枠を設けず、また、「食」だけの特産品に限定しない方が、学習の広がりと深まりが期待できるものと考えた。

市産品に関する情報は、実物や市広報のパンフレット、電話インタビューから得られた。ネットからの情報は、知名度の高い特産品でなければホームページが開かれていないこと、開かれていたとしても４年生には、内容が難解であるなど、ネット活用のあり方を考えさせられた。そのため、教師の支援としては、ネット情報を子どもと読み合わせたり、あるいは、見学や電話インタビューの方法、ファックスの送信方法を学ばせることにあった。

（1）活動事例１―ぬちマース（海塩）のグループ―

「生命の塩、ぬちマース」と名づけられた海塩は、霧状にした海水をネットに吹き付け、温風をあてて瞬間的に水分を蒸発させて塩を結晶させる「常温瞬間結晶法」で生成されている。海水中のマグネシウムやカリウムなどの、人間に必要なミネラル成分が豊富であることから、ギネス記録となり、市産品を代表するものである。本市から近距離にある浜比嘉島の海水を100％使用している。ぬちマースに興味を示したのが、「ぐしかわ焼きぶた」を見学した直樹であり、彼は豪（たける）と組んで「ぬちマース探検

隊」なるものを組織した。彼らの学習計画をみると、ぬちマース工場の見学に始まり、ぬちマースの効果や歴史、値段、「ぬちマースを、直樹と豪がつくれるか」等を質問事項としている。特に直樹は、父親が発毛促進のために、ぬちマースを使用していることから、人間の体にとっての効果のほどを聞きたがっている。豪は、インターネットでぬちマースのことを調べて、「ぬちマースの“ぬち”は、「いのち」という意味がある」こと、「“マース”は、「塩」の意味があること」に気づいている。直樹は、家庭でもパソコンを所有しているため、ネットで知り得た情報を素材にしながら、『電子紙芝居ソフト：ハイパーキューブ』で紙芝居を制作し、のちの中間発表会で報告している。

直樹と豪は、ネット情報を活用しながら、ぬちマースについての知識を広げ、また、一方では、ぬちマース工場の見学計画を立てている。「今日、豪君と僕とで、ぬちマース工場に電話をかけて、いつ行くか聞いたら、来週の火曜日の２時に来て下さい、と言っていました。新しく知ったことは、ミネラルが世界一だそうです。ミネラルとは、カルシウムや鉄、マグネシウム、リン、亜鉛のことだそうです」（直樹）。「ぼくは、今日、ぬちマースについて、インターネットで調べました。わかったことは、コバルトブルーの海から生まれているそうです。ミネラルをそのままとりこんだため、100グラムあたりの塩化ナトリウムの量がきょくたんに少ないそうです」（豪）。この追究の過程で、豪は「このそうごうは、楽しいです。そのわけは、ぬちマースを調べたかったら、じっさいにそのぬちマースを作っている工場にいけるから」と言い、直樹は、「インターネットで調べたり、新聞を作ったりするのがとっても楽しいです」と答え、意欲的に学習に取り組んでいる。

６月13日、工場見学日である。塩の出荷日ということもあって、「雪国のような景色」は、見ることはできなかったものの、従業員が手作業で塩の中から異物を取り除いている作業を見て驚いたようである。豪は「『ぬちマース』は食べるもの、『海の雪』は、体につけるもの」であることを聞き、商品『ポケジオ』は、「ポケットに入れて、けいれんとかをしたときに食べたらすぐ直る」という説明を受けている。直樹は、デジカメで現場を撮り、中間発表会の素材に活用した。

（２）活動事例２―赤野とうふのグループ―

母親が赤野とうふに勤め、また、久高将勝さんの講話により、一層、赤野とうふに関心をもった、竜一（りゅういち）は、敬育（けいすけ）、笙悟（しょうご）、大介（だいすけ）の３人と「赤野とうふ探検隊」を組織した。グループの学習計画をみると、20近い質問項目が準備され、豆腐探検に対する強い意欲が感じられた。豆腐の形や栄養、一日の生産量、豆腐工場の仕組み等の質問に始まり、「なぜ、大豆から豆腐が作られるのか」「なぜ、ゴーヤーチャンプルーに、とうふが入っているのか」「とうふは、なぜ、少ししか味がしないのか」等、生産業務に就いている人でも難解な質問も準備している。

竜一は、休日、母親と共にカメラを持参し工場を訪れ、①豆腐の種類（絹ごし豆腐、ゆし豆腐、あつあげ、シマ豆腐）、②大豆の輸入元（アメリカ、カナダ）、③納品している店舗数（55店舗）、④一日2000丁の生産量、⑤一日の売上（30～35万円）、⑥人気のある豆腐（シマ豆腐）、⑦オカラの使途（スーパーで販売、飼料としてブタやヤギ、牛、鳥、アヒル等にも与えている）等の質問を、代表者の久高さんに求めている。また、「おいしいとうふを作るために、研究し、苦労している」ことをあらためて聞き出し、見学のメモには、「久高おじさんのゆめは、世界一おいしいとうふをつくること」であると結んでいる。同グループは、豆腐がどのような調理方法に向いているのかを話し合った結果、沖縄の代表的な家庭料理である、ゴーヤーチャンプルーに挑戦することにした。

赤野とうふのグループは、家庭科室でゴーヤーチャンプルー作りに挑戦した。食材は、もちろん赤野とうふを始め、ゴーヤー、卵等、ゴーヤーチャンプルーには欠かせないものばかりである。調理後の敬育の感想である。「まず、ゴーヤーを切って、箱に入れ、塩を入れて手でかきまぜました。とうふを手でつぶして、そのあと、とうふをきつね色になるまでいためました。そして、ゴーヤーをいためて、最後にゴーヤーと、とうふをまぜて、おわりました。友寄先生が、おいしいと言ったので、よかったです」。赤野とうふとゴーヤーを組み合わせて調理したチャンプルーに、子どもたちは大満足である。

（3）活動事例３―ＥＭグループ―

学校近郊のＥＭプラザに、早速、見学交渉をしてきたグループがある。温己（あつみ）、千尋（ちひろ）、夏実（なつみ）、夕香（ゆうか）の４人である。このグループの学習計画には、「ＥＭとは何か」という基本的な問いかけから、「ＥＭの名前の由来」「いつ、どこで作られたのか」「ＥＭと健康の関係」「ＥＭ関連商品の種類」等の質問を用意し、ＥＭプラザでの職業体験を希望している。４人は、放課後、ＥＭプラザの店員に見学・職業体験を申し出て確約している。翌日、早速４人（後に好香（このか）が加わる）は、ＥＭについての基本的な質問をし、関連ビデオを視聴している。見学後の子どもの感想である。「今日、わたしは、そうごうの時間に、グループを作ってＥＭプラザに行きました。ＥＭは、なぜＥＭとつけられたかという質問では、ゆうようびせいぶつのこと、といっていました。琉大の比嘉照夫さんが開発したと言っていました。ＥＭを使うと、ゴミが少なくなり、家庭がさわやかになると言っていました。ＥＭは、地球のかんきょうにもやさしいという。生ゴミを土にうめると、植物が育ちやすくなると言っていました。ＥＭプラザで働いている人は、３人。店長は、宮城さんという人です。ＥＭのぼかしは、ペットの小屋にかけたりすると、においがなくなると言っていました。ぼかしは、いろいろな役目をしているそうです。ＥＭのことをもっと知りたいです」（千尋）。「ＥＭのやさいは、具志川市内や宜野座村からきているそうです。ＥＭを使ったら、ゴミがへったそうで

す。ＥＭは、トイレそうじにも使えるそうです。ＥＭは、地球のかんきょうにもいいそうです」(夕香)。

初日のＥＭプラザ訪問は、質問とビデオ視聴が主なものであったが、２日目からは、レジに立ったり、店内の商品の準備、陳列や整理、清掃、ＥＭ品のチラシ作り等と活動が広がっていった。こうした子どもの活動は、プラザの店員の計画と指導によるものである。「今日、ＥＭに行って、お手伝いをしました。商品ならべやぞうきんがけ、レジのお手伝いや値段づけなどをしました。そして、千明さんたちがきたので、お茶をだしました。おわんを洗って、シシトウを200グラムに分けて入れました。その次にジャガイモもやりました。つかれたけど、とっても楽しかったです。今度は、レジで商品の説明とかをします。ちょっとむずかしそうだけど、がんばってみます」(温己)。「今日、ＥＭプラザでそうじをしました。そうじ表みたいなものがありました。私は、たなふきをやったあと、商品をならべて、値段づけをすこしして、レジを千尋さんとしました」(夏実)。ＥＭプラザ体験学習の３日目[3)]、夏実と夕香は、市内にある熱帯植物研究所を訪問している。同研究所は、ＥＭの研究機関として知られ、品種改良を進めている所である。夏実は、多種類のランの見学をしたり、ＥＭ入りのパンを食べたりする等、ＥＭが活躍している場面を体験的に学びとることを積み重ねてきている。

ＥＭグループは、活動当初からプラザを中心とした活動を展開してきた。子どもの活動のためにＥＭのスタッフは、一人ひとりの子どものためにファイルを作成し、「にっぽう」と称してその日の活動をふりかえさせている。「にっぽう」をみると、子どもたちは、割り当てられたその日の当番である、店内の掃除担当、商品説明担当、商品陳列担当、レジ担当を通しての感想と「お店に希望すること」を毎日綴っている。それに対して、スタッフは、子どもたち一人ひとりに「お店から一言」として、毎日、励ましや感謝、諸注意の返事を書いているのである。

（４）活動事例４―ゴーヤーのグループ―

沖縄県の名産、ゴーヤーを追究しているのが、絵梨花(えりか)と菜津美(なつみ)、結香(ゆいか)の３人である。インターネットでゴーヤーの由来等を調べていたこのグループは、いくつかの疑問を、ＪＡ沖縄経済連にファックスで送り、答えてもらおうと準備した。主な質問は、次の５つである。①ゴーヤーのつぶつぶは、なぜあるのか、②なぜ、ゴーヤーは、苦いのか、③ゴーヤーの種の量、④ゴーヤーを作っている農家は、どこか、⑤ゴーヤーの種類、である。しかし、ファックスの返信がなかなかこないため、近郊のＪＡ具志川支店を訪ねることを勧めた。３人はＪＡを訪れ、次の諸点を学びとっている。①ゴーヤーには、アバサゴーヤー、中長ゴーヤー等の種類がある、②苦いわけは、モモルデシンという苦い成分がある、③ゴーヤーの表面につぶつぶがあるのは、熱帯地方の野菜なので熱発しないように冷やす役割を果たしている、④ゴーヤーは、ビタミンＣが豊富

で火を通してもこわれない、⑤最近では、ゴーヤーサラダ、ゴーヤーを乾燥させて作るゴーヤー茶、ゴーヤー天ぷら、ゴーヤーの漬物等にして食べたりしている、⑥ゴーヤーの花の色は黄色である。

菜津美は、ＪＡ農協を訪問したことが印象的だったようであり、この日の日記に次のように記している。「今日、そうじがおわってから、絵梨花さんと結香さんと私でＪＡユイナに行きました。絵梨花さんが『ゴーヤーのつぶつぶはなぜあるんですか』と聞くと、ちょっと来て下さいと言われ、３人で女の店員さんについて行きました。一番おくの方に行ってみたら、事む所があって、ＪＡユイナで働いているおじさんがいて、ゴーヤーのことについて質問しました。するとそのおじさんは、どこかにでんわをかけていました。でんわがおわって、私たち３人の所に来て、『今おじさんもわからなかったから、東京のせんもん家の人に聞こうと思ってでんわしてみたんだけど、みんな、でかけている』と言いました。ちょっと時間がたって、おじさんは、もっとおくの部屋からちょっとふとっているお兄さんがきました。そしてゴーヤーのつぶつぶがなぜあるのかをおしえてくれました。あと、ゴーヤーの種類をおしえてくれました。しおかぜゴーヤー、むるぶしゴーヤー、あばさーゴーヤーとたくさんあるそうです。ゴーヤーは、ビタミンＣがほうふで夏バテをふせぐそうです。ＪＡユイナへ明日手伝いに行きます。そのついでにゴーヤーのなえを買います。そして、ゴーヤーをうえます。とても楽しみです。明日のお手伝いもがんばります」

翌日、再度ＪＡを訪問した３人は、ゴーヤーの苗を購入し、学級園で植え付けている。「ゴーヤーのなえは、ひとつ50円でした。中長ゴーヤーを２つ、アバサーゴーヤーを２つかいました。学校に帰って、植える所がわからなかったので、理科の大城先生に聞きに行って、２組の畑の半分に植えました。はやく大きくなって、ゴーヤーがたくさんなったらいいなと思います」（菜津美）。３人のゴーヤー栽培は、今も続いている。

（5）活動事例５―「やきもちやき」のグループ―

理奈（りな）、ひとみ、朋美（ともみ）、悠里（ゆうり）の４人は、具志川市赤道にある、「はまやす」が提供する「やきもちやき」に関心を寄せ、活動を展開してきた。この商品は、担任が特産品のオリエンテーションの時に持参し子どもに紹介、味見させたのが子どもとの最初の出会いである。５個入り１パック（１個80円）で、よもぎ、うっちん、紅イモ、ニンジン、オリジナル味の５つの味が楽しめるところがミソである。子どもたちは、３日間、母親に引率されて「はまやす」に出向き、「やきもちやき」を実際に焼いたり、チラシを作成し配り、あるいは、交代でレジの担当や店頭に立ち、お客の呼び込みを経験することを通して、「やきもちやき」の作り方や「物を売る難しさ」を体得していった。とりわけ、理奈と悠里は、県立中部病院の中でビラを配り、朋美は、県道75号線の大通りでビラを配ることで、子どもなりの広報活動を展開してきた。商品の

よさを描いた看板を制作し、店頭を飾り、他のグループの看板作成のモデルともなった。また、ひとみは、「やきもちやき」の作り方として「タレ（もと）を、型に入れて、ゴマをふりかける。ひっくりかえしてアンコを内がわにつけ、合わせる」と図解入りでメモしている。一貫して「やきもちやき」にこだわりをみせるグループである。

手づくりの看板を背にして、店頭に立つ「やきもちやき」探検隊。ビラを作ったり、実際に「やきもちやき」に挑戦したりと、活動の幅が広がる。「物」を売る難しさと喜びを体験した。徹頭徹尾、「やきもちやき」にこだわり、のちの「子ども物産展」においても、「やきもちやき」を販売する活動を展開した。

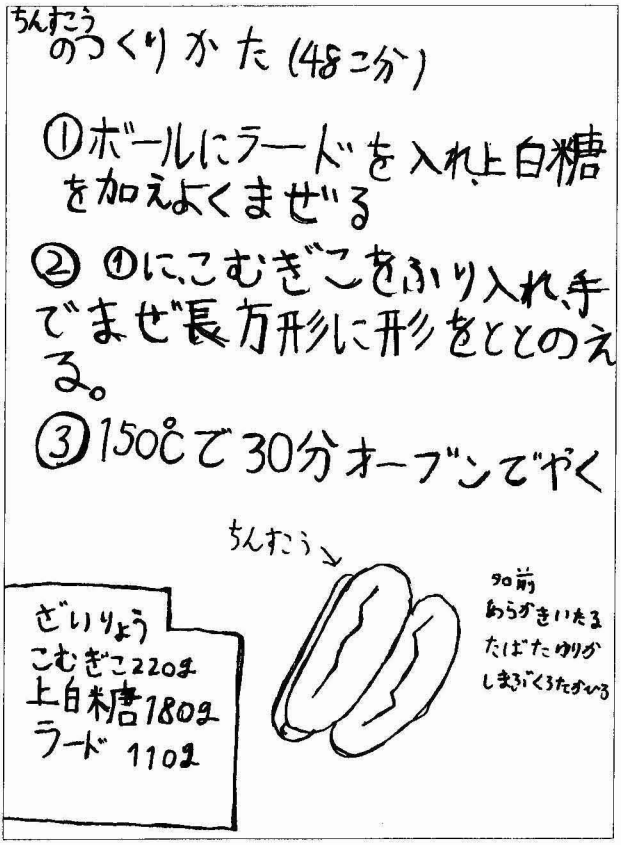
（6）活動事例6—おかし（ちんすこう）のグループ—

夕季花、至、貴弘（たかひろ）の3人は、数あるお菓子の中でも、沖縄の銘菓といわれる、ちんすこうに当初から関心を寄せ、最終的には、家庭科室で市販のちんすこうにも負けない、手作りのちんすこうを焼き上げた。まず、グループの活動をみると、インターネットの情報から、ちんすこうの種類を探し出し、図書館の本からちんすこう作りの「レシピ」を入手している。

夕季花の母親の見守る中、ちんすこう作りが始まった。豚の油であるラード、小麦粉、上白糖が主な材料である。「ぼくは、そうごうの時間に、ゆりかさんとたかひろくんといっしょに、ちんすこうを作りました。ぼくが、ちんすこうに使う道具を集めて、ゆりかさんがちんすこうに使う材料をもってきました。ラードをボールに入れ、上白とうを入れ、まぜ、小むぎこを入れました。これを長方形の形にして、オーブンでやきました。あじみをすると、とてもおいしかったです」（至）。「グループのいたるくんと、たかひろくんと、おかあさんで、かていか室にいって、ちんすこうをつくりました。まず、ラードをはかって、それに上白糖をいれる。上白糖がほとんどとけたら、小むぎこをはかり、それに入れます。そして、手でよくかきまぜて、パンのきじみたいになるので、それをてきとうな大きさ（長方形みたいなもの）の分をとって、オーブンで150度でやく。かていか室のオーブンはこわれていたので、ゆちゃ室のオーブンを使いました。30分やいたあと、色がついていないので、あと10分やきました。そして、できあがったちんすこうを、洋子先生とおかあさんと、いたるくんとたかひろくんで食べて、職員室にいた先生にも食べてもらうと、ほとんどの人が『できるんだねえ』と言いました。お店に売っているものと同じ味がして、とてもおいしかった

です」（夕季花）。

ちんすこうの個数が少なかったのか、夕季花は、自宅で学級全員分のちんすこうを焼き上げ、翌日、みんなに１個ずつサービスしている。手作りのちんすこうを食べた子どもたちは、皆一様に「おいしい」と声を上げた。「私は、ゆりかさんたちグループは、チームワークをとても大切にしているグループだと思います。ゆりかさんたちが力を合わせて作ったちんすこうは、お店で売っているちんすこうよりも心がこもっていて、いいと思います。ゆりかさんたちは、おかしたんけんたいの中で一番、じょうずにおかしを作るグループだと思います」（菜津美）。「今日、ゆりかさんたちのグループの手作りのちんすこうをたべました。お店で売っているちんすこうと味がそっくりでした。あまさもお店よりもおいしかったです。形もちゃんとできていて、とってもおいしかったです。おもしろい形もありました」（利江）。「今日、ゆりかさんたちが作った、ちんすこうを食べました。とってもおいしかったです。ぼくは、ぬちマースを使っておにぎりとかをつくりたいです。さっき、食べたちんすこうをもう１回、食べたいです」（豪）。その後、ちんすこうグループは、具志川市洲崎にある「まるひら製菓工場」を訪問、手作りのちんすこうと、工場で生産されているちんすこうの味比べを楽しんだ。



ちんすこうのレシピ」

5．特産品自慢大会―ポスターセッションにて―

6月17日（土）の第4校時、グループが調べてきたこと、体験してきたこと、見学してきたこと、ボランティアとして手伝ってきたこと等をポスターにまとめ、中間発表会と称して、ポスターセッションを催した。準備のための時間が、前日の2時間程度であったため、ポスターにまとめることが精一杯で、発表用のシナリオ作りまでは行き届かなかった。それでも、今の段階で発表（特産品の自慢）をすることで、他のグループが特産品の何を探求し、自慢しようとしているのかを聞く機会を設定することが大切であるし、ここで「学びの共有化」を図りたかったのである。

冒頭で、ぬちマース探検隊の電子紙芝居の発表、続けて、女子3人の「やきもちやき探検隊」のペープ・サートの発表をモデルにして、各コーナーに分かれての発表会となった。発表は、基本的にひとつのグループがAとBに分かれ、発表者と聞き役になった。4年広場は、活気にあふれる会場となった。最初、ためらいがちだったグループも、聞き役の子どもが集まってくると、次第に発表にも熱がこもってきた。

「紅イモ探検隊」は、説明用ポスターを元にセッションを開き、友奈（ゆうな）は、母親と夜遅くまで頑張り作ったという紅イモムーチーを展示、試食させていたことが好評であった。当初このグループは、紅イモケーキのおいしさに関心を示したが、紅イモそのもののよさ（低カロリー、太らない、食べやすい）を発見し、ケーキをやめて「紅イモ探検隊」に変更している。「黒糖探検隊」（夏生（なつき）、悠司（ゆうじ）、里紀）は、「純黒糖」「梅黒糖」等の10種類以上もの黒糖関連菓子を持参し、展示しての説明であった。夏生は、黒糖が健康に良いことや「黒糖でつくるおかしがほかにもたくさんあること」、インターネットを活用して、黒糖の作り方を調べ、「儀間真常」のことにも言及している点が特徴的である。

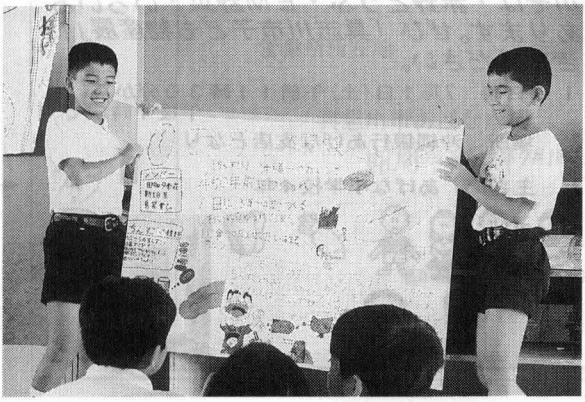
「食」に関係する特産品ではないが、一貫して「シーサー」にこだわり、フィールド・ワークを進めてきたグループがある。和樹（かずき）、正典（まさのり）、翔一郎（しょういちろう）、俊（しゅん）の4人である。このグループは、図書やコンピュータで調べる前に、校区内の安慶名区と西原区を歩き回り、形や色等の形態が異なるシーサーを30数点の写真として記録している。休日には、家族と具志川市近郊のシーサー作りの焼き窯を探している。発表は、主にシーサーの起源と歴史、シーサーの意味を説明していた。発表用のフラッシュカードには、①14世紀から15世紀に中国から伝わった、②シーサーのもとは、ライオンがモデル、③昔、獅子と呼ばれていた、④幸せを呼ぶのはメス（口を閉じている）、悪を追い出すのはオス（口が開いている）、⑤シーサーを作る土は、ヤンバルの土、等と説明が簡潔に記されていた。

子どもたちは、各探検隊のポスターの出来栄え（読みやすい、分かりやすい、カラフルで楽しい等）に驚き、市産品の説明に聞き入っていた。また、手作りの紅イモムーチー、シーサーの写真、実物の黒糖菓子、ペープ・サートの実演、パソコンでの発表、

ぬちマース（『ポケジオ』）の味見の提供に感心していた。ポスターには、特産品の“よさ”が子どもの言葉で記述されている点が特徴的であった。「私は、一番すごいなと思ったグループは、２組の「ぬちマースたんけんたい」と、くろざとうのグループと、１組の「ぬちマースたんけいたい」です。２組のつかささんたちは、ぬちマースを調べていました。ぬちマースの説明が終ると、『ポケジオ』を５粒づつもらいました。とてもすっぱかったです。１組の「ぬちマースたんけんたい」の直樹（なおき）君たちは、コンピュータでかみしばいを作って、スゴイと思いました」（菜津美）。「私は、なつき君たちの黒とうに感心しました。いろいろな黒とうがありました。とっても感心しました。それと紅イモのはるかさんたちのも感心しました。自分で作った紅イモのモチもありました。「やきもちやき」のペープ・サートがとても楽しかったです」（温己）。「感心したことは、やはり赤野とうふです。赤野とうふは、社長が学校まで来て説明をしたので、みんなむこうにいかないはずと思ったけれど、たくさん来ててすごかったです。そして、ゴーヤー。ゴーヤーのつぶは、なぜあるのかを聞いたら、水分が入っていると言いました。そこまで調べるなんて、すごいと思いました」（夕季花）。

他のグループを聞いての子どもの学びとりは、以上の諸点であるが、一方、子どもの探求活動を通しての“特産品”の諸特徴、すなわち自慢や売りは何であろうか。ＥＭプラザに通ったグループは、ＥＭを開発した比嘉照夫さんのことや、「生ゴミにぼかしを入れると肥料になること」「ＥＭＸセラミックスパウダーを配水管に入れると（水にとかして）水が綺麗になること」「ＥＭのゴーヤーは、ふつうのゴーヤーより苦くないこと」（好香）等を自慢していた。ちんすこうの種類の自慢（夕季花）、ゴーヤーの表面のつぶつぶの秘密（菜津美）、市内の菓子店での自慢の品（利江）、車エビの生態（祥（しょう））、具志川そばのおいしさと店のサービスのよさ（樹）、赤野とうふのおいしさ（敬育）、沖縄にひとつしかない製紙工場（昭和製紙）のトイレットペーパーは、水によく溶けるものであること（千明）等を、自分たちが学習した“特産品”の自慢できることがらである、とまとめている。

今回、他のグループ（４年生）対象の自慢（宣伝）大会を試みたが、続けて、市内外の住民への情報発信と即売のため、「具志川市子ども物産展」の準備に取り組んだ。



ポスターセッション」

6．「具志川市子ども物産展」の開催

「具志川市子ども物産展」の会場は、具志川市のメインストリート（県道75号線）に面した空き店舗である。この店舗は、以前、文房具店であったが、現在は貸し店舗となっている。同店舗の向かい側は、活況のあった安慶名市場であるが、郊外への大型店舗の進出に伴い、客足が遠のき「シャッター通り」と化している。子どもの特産品に関する情報発信のために同店舗を活用したいと考えたのは、①バス停の近くであり人通りが多く、情報を発信するためには最適な地であること、②店舗に隣接した銀行の駐車場が利用できること、以上の２点が主な理由である。しばらく空き店舗として放置されていたため、店舗内外の清掃が必要であった。「子ども物産展」の１週間前から、子どもたちと計画的に清掃活動を計画し、物産展会場として整備していった。

一方、教室では、「子ども物産展」を地域住民へ知らせるビラとポスター作成が始まっていた。ビラの印刷枚数は、1000枚を超え、子どもたちが校区内を手分けして配っていた。ポスター10数枚は、安慶名公民館と西原公民館をはじめ、商店街の中で店頭への貼り出しに、協力してくれる店を子どもが直接交渉した。直輝（なおき）は、自宅のパソコンを活用して、ビラを作成。デジカメで物産展会場を取り込んでいるのが特徴的である。また、縦４m、横１mの垂れ幕作成も始まり、物産展への準備が本格的に始まった。

パソコンを活用して作成したビラ

物産展に出品するものは、ゴーヤー、ちんすこう、ぬちマース、黒糖、やきもちやき、トイレットペーパー、クッキー、飲み物等である。事前に、地元の関係業者に協力願いの文書を発送したところ、無償または仕入れ値で現物を提供してくれる業者があった。例えば、地元の製紙工場は、九州・沖縄サミット記念のホテルロール200巻であったり（これは、サミット出席の首脳が宿泊するホテルでのみ使用されるものであり、市販はされない限定生産品である）、ある業者は、グアバ茶30袋の提供、西原の住民からは、ゴーヤー数十本であったりした。物産展当日、子どもたちは、家庭科室でちんすこう、クッキー、紅イモもちを作り、自作ラベルを貼って販売の準備を進めていた。手作りの品を不特定多数の市民に販売することについて懸念があったが、事前に保健所に「バザー等報告書」を申請、物産展前日の６月30日、「営業報告済」が発行されて許可を得ることができた。同日、安慶名公民館からテーブル、椅子を運び、垂れ幕を掲げ、会場を整備した。

自作ラベル

石保第 2000005 号　　業種　営業報告（バザー）

営　業　報　告　済

平成　12年　6月　30日

営業所の名称

具志川市立あげな小学校

報告者氏名

具志川市立あげな小学校　大湾達一

営業所所在地

具志川市あげな市場

期間　平成12年7月1日（1日間）

石川保健所長　　譜久山　民子　　印　沖縄県石川保健所長

物産展当日、午前11時までに商品を搬入し、11時30分のオープニングを待った。その間、絵梨花は、安慶名公民館と西原公民館から、「子ども物産展」の案内を放送した。会場では、あげな小学校ＰＴＡ役員バンドが雰囲気を盛り上げ、４年生全員によるダンスで幕が開かれた。ダンス終了後、夕季花が開会宣言を行った。「みなさん、こんにちは。わたしたちの『ぶっさんてん』の会場にきていただき、とてもうれしいです。わたしたち、あげな小学校４年生は、沖縄県や具志川市の『とくさんひん』について学習してきました。具志川市で有名な、ＥＭのことや、赤野とうふ、ぬちマース、昭和製紙工場のトイレットペーパー、そして、やきもちやき、紅イモなどについても調べてきました。具志川そば、くるまエビ、ゴーヤーについても、いろいろ学んできました。パソコンで調べたり、じっさいに工場を見学したり、学校のかていかしつで作ったりしました。わたしは、『ちんすこう』にきょうみをもったので、『ちんすこう』について調べ、じっさいに『ちんすこう』を作ってみました。これが、わたしたちのグループが作った『手作りちんすこう』です。工場で作られた『ちんすこう』にまけない、じぶんたちの『とくさんひん』を作りあげました。ぜひ、味を比べてください。それでは、これから『具志川市子どもぶっさんてん』をひらきます」（夕季花）。開会宣言のあと、多くの市民が詰めかけ、物産展会場は、盛況であった。

物産展会場には、ＥＭネギ120本、ＥＭ野菜100袋、中部農林高校の野菜（きゅうり80袋、ナス22袋）、ちんすこう（100セット）、飴（30セット）、ゴーヤー（100本）、グアバ茶（15セット）、ぬちマース・『ポケジオ』等（15箱）、トイレットペーパー（200巻）、飲み物（150缶）、ぬちマースおにぎり（50パック）、「やきもちやき」（50個）、手作りちんすこう（30パック）、紅イモムーチー、手作りクッキー、おからクッキー等、品数は、1000点を超えた。

来店した客から「赤野とうふの大豆は、どこからきたのか」を質問された竜一は、「アメリカやカナダから来たもので、遺伝子操作のない大豆が使われている」と返答したという。また、ゴーヤーは、何故苦いのかを聞かれた絵梨花は、「つぶつぶの中に、モモルデシンというのがあって、これが苦味の原因」であることを答えている。他方、市販のちんすこうのパック（４個入り）の価格が30円であるのに対し、手作りのちんすこうの価格が50円であったため、「売れ残り」を心配したが、夕季花は、強気であった。自慢の手作りの品が売れないことはない、というのがその理由である。物産展を振り返った夕季花は、次のような感想を記している。「物産展でがんばったことは、ちんすこうと、タンナファンクルーとかは、すぐに売れたのに、アメ玉だけ、売れ残っていたので『やすいよー、やすいよー』と大きな声を出しました。うれしかったことは、買ってきて売るちんすこうよりも、手づくりで出来たてのちんすこうから先に売れたことです。新聞記者みたいな人が来て、しつもんされて、『手づくりちんすこうから、売れたのでよかったです』と言いました」。夕季花は、物産展の翌日、地元の新聞に、来店した人たちに対しての感謝の内容を投稿している（資料３ 参照）。

７．課題と展望

市産品の再発見を起点とした「ふるさとの食自慢」の学習であった。子どもたちは、意外にも市産品の多さに気づき、市産品追究の過程では、工場見学や調理等の直接的・体験的な活動から商品開発に関わる人々の工夫や努力を学び取ってきた。市産品の“よさ”を子どもの視点からとらえ直し、その“よさ”を広く市民に対し情報発信する目的で「子ども物産展」を開催してきた。この学習活動を通して、子どもが自分たちの住むまちの“よさ”を見出し、まちの発展に対する子どもの思いや願いを育むことができたことは、今後、子どもが主体的に“まちづくり”を考えていく上で重要である。しかし、他方では、学校と地域間での交流と校外での学習活動が展開するにしたがい、①校外における子どもの安全保障問題（学校保険問題）並びに保護者の子ど

も送迎に関わる安全保障問題、②講師への謝金、等の総合学習を展開する上での課題もここで指摘しておきたい。以上の課題は、豊かな総合学習を展開するためにも学校全体の議論をふまえた上で条件整備を図っていくことが重要である。

【注及び引用文献】

1）玉井康之は、総合的な学習や体験的な学習の教育効果について、次のように述べている。「子どもたちは地域に学ぶ活動を通じて、地域を知れば知るほど、地域を誇りに思うようになる。体験的な活動を含めて、地域に学ぶ教育活動は地域の人・物に親しみを持たせる教育でもある」（「地域に学びを求める『総合的な学習』の可能性―社会教育の関わり方を探る」『月刊社会教育』国土社、2001年５月号、37頁）

2）今回のまちづくり学習の展開している中、建設省は、まちづくりについて広く住民の理解と協力を得ることを目的とした「まちづくり月間」を設け（2000年６月）、住民と国、地方公共団体とによる豊かでうるおいのあるまちづくりを推進するための諸施策を展開している（建設省パンフレット 『つくろうよ。2000のゆめにであうまち』平成12年度）。県産品奨励月間実行委員会は、「県産品の需要を喚起し、本県産業の振興と雇用の拡大を図ることを目的」として７月１日から31日までの１ヵ月間を「2000県産品奨励月間」として、県産品奨励に関する事業を積極的に展開している。そのため、同委員会は、「小・中学校の児童生徒の皆様に、県産品の優秀性と地場産業振興の必要性などについて理解を深めていただくための周知」、及び「県産品の日」に、「県産食材を活用した料理メニュー」の普及を学校給食に求めている（『奨励月間発』第４号、平成12年４月27日）。

3）６月12日、ＥＭプラザで学習する５人にとっても、また、４年生全員にとってもＥＭを活用した栽培実習を経験させることは大切なことだと考え、ハツカネギを植える計画をした。６月12日（月）、具志川市ＥＭ推進プロジェクトの平田仁、小島慶太両氏を指導者に迎え、ポット130 個余にハツカネギを植えた。腐葉土とハツカネギは農協から購入し、植付け後、希釈したＥＭをかけた。これを７月１日（土）の「物産展」で販売した。

〈資料１〉

学習活動計画（２７時間）

＜ふれる＞

第一次
１～５時

☆ふるさと・具志川市の特産物を発見しよう
- o　沖縄を代表する特産物（名物料理も含む）と具志川市の特産物を例示し、沖縄県（具志川市を含む）には、多くの特産物があることに気づく・・＜学級集団＞
- o　興味も持った特産物について、情報を得るために調べる・・＜個人・グループ＞

（関連）

☆学習・活動の仕方を考えよう。・・＜学級集団・あげなっ子タイム＞
- o　何のためにこの学習をするのか話し合う。
- o　学習の順序や方法がわかる。
  （ふれる・つかむ→たてる→しらべ・やってみる→ふかめる→まとめ・つかう）
- o　調べ方・電話の仕方等、困ったときの解決方法を知る。

６時

☆ オリエンテーション・・・＜学年集団＞
- o　活動のねらいと活動の仕方を確かめる。
- o　何のためにこの学習をするのか話し合う。
- o　私たちができることは何か考える。
- o　これまでの学習をまとめ、市内外へ発信する活動であることを知る。

（関連）

店舗におく花をプランターに植える＜チャレンジタイム＞
- o　グループ作りをする。（２～４名）

＜つかむ＞

第二次
７～９時

☆テーマを決定しよう・・・・・＜グループ＞
- o　やってみたいことが自分たちの力でやれることかどうか調べる。
- o　個人のテーマを整理し、グループでテーマを決定する。（ウェビング法で）
- o　テーマ名だけで、どんな活動をするかわかるようにする。
- o　何をするか、何がしたいのかを考え、活動を話し合う

☆ゲストティーチャー久高將勝（赤野とうふ社長）の話を聞く

決定したテーマ名

- o おかし
- o 車えび
- o 具志川そば
- o ゴーヤー
- o 具志川市のおかし
- o 紅いものおかし
- o 沖縄のおかし
- o トイレットペーパー
- o シーサー
- o やきもちやき
- o 赤野とうふ
- o 黒　糖
- o ぬちマース
- o ちんすこう
- o EM

＜たてる＞

１０時

☆ 活動グループに分かれて、学習計画を立てよう。
- o　一人一人で考えた活動を整理し、自分達でできるかどうか話し合う。
- o　活動予定時間や内容・方法・順序について話し合い活動計画を立てる。

＜しらべ・やってみる＞

１１
↓
１８
時

☆自慢する特産物について調べよう＜グループ・個人 ＞

図書・パンフ等の読み物で調べよう	インターネットで調べよう。	現地（電話・ファックスも）で調べる・	食してから調べる	作ってから調べる。
o 製法・材料 o 作業の様子 o 特徴・しくみ o その他	o 製法・材料 o 作業の様子 o 特徴・しくみ o その他	o 現地の様子・しくみ、願い・工夫 o 作業のようすや取り組み・等	o 食べて違いや食感を楽しむ o 製品への取り組み o その他	o ゲストティーチャーと一緒に

☆作ったり・販売したりして体験してみよう
- o　ネギ（EM）を植える＜集　団＞

１９
↓
２０
時

＜まとめ・つたえる＞

☆じまん大会をしよう（中間発表）

- o　調べたことをまとめ、発表の仕方を話し合う。
- o　発表の準備をする　＜チャレンジタイム＞
- o　発表の練習をする。＜あげなっ子タイム＞
- o　発表会（じまん大会）を開く

＜発表方法＞

パソコンで　o ペープサートで　o 写真を中心に　o 壁新聞で　o カードで　o 実物で

第三次

２１時

＜たてる＞

☆発信する（具志川市子ども物産展）内容を考え、計画を立てよう

- o　自慢大会の反省をもとに、自分たちが出品するものを話し合う。
- o　物産展を開くまでの取り組みを知り、計画を立てる。
  - ・多くの人に来てもらうための方法を考える。
  - ・品物の仕入れ・販売方法を考える。
  - ・会場作りについて考える。＜学級活動＞ (関連)

２２時
↓関連
２４時

＜やってみる＞

☆発信する方法を考え、具志川市子ども物産展の準備をしよう

- o　分担して広報（宣伝）活動をする・・・＜図工＞

ポスター作り　o チラシ作り　o 垂れ幕作り　o 公民館から放送

- o　品物の仕入れし販売の準備をする。
- o　材料を買って、製品を作る。
- o　空き店舗（会場）を整備し、飾り付けをする・・・＜あげなっ子タイム＞ (関連)
- o　案内状・お礼状を書く・・・＜国語＞ (関連)
- o　出し物（リズムダンス）の練習をする・・・＜体育＞

２５
↓
２６時

＜やってみる＞

☆物産展を開こう

＜ねらい＞「具志川市子ども物産展」における販売活動をとおして、自分たちが調べた市産品のよさを地域の人々に知らせる。

○リズムダンスを踊る
○販売をする。　＜予想される品物＞
○製品のよさを中心に紹介する。

のみもの
中農野菜
具志川そば
ゴーヤー
具志川市のおかし
紅いもの手作りおかし
沖縄のおかし
やきもちやき
トイレットペーパー
シーサー
ゴーヤーチャンプル
赤野とうふと
ぬちマースとおにぎり
手作り黒糖チンスコウ
黒糖
ちんすこう
EM制品とEMねぎ

○後片づけをする

２７時

＜振り返り＞

☆活動を振り返ろう

- o　活動の反省をする。
- o　報告文（レポート）を書く・・・＜国語＞ (関連)

o ふるさとの特産品を用いて給食の献立作りをする

〈資料２〉

『沖縄タイムス』2000年７月５日（水）朝刊

〈資料３〉

『沖縄タイムス』2000年７月９日（日）朝刊

〈資料４〉

『琉球新報』2000年７月11日（火）朝刊